

『東方』二九三号より

沖縄の生活文化

——古文書と実地調査から

小川 陽一（東北大学名誉教授）

本書は、風水・暦書・占い師に焦点を当てて、王国時代の琉球から現代の沖縄に至る生活文化というか、日常生活の知のありようを、残された書籍・文書と実地の調査によって考察したものである。

著者はもともと中国思想史を研究していたが、若いころから南島にあこがれを抱いてきたこともあって、次第に琉球文化研究にも、のめり込んでゆき、東アジア文化論に研究領域を広げた。過去十五年間に二十回沖縄に通い、十五篇の論文等を発表してきた。このほど統一テーマのもとに整理して一本にまとめた。

一 内容と特色

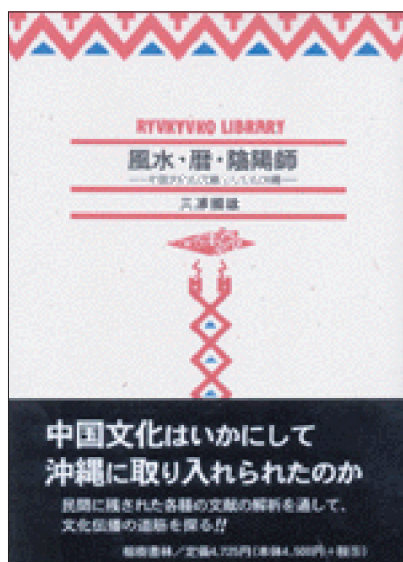
目次によれば、Ⅰ沖縄の風水、Ⅱ沖縄の暦書と通書と日用百科事典、Ⅲ沖縄の易者・サンジンソーの三部構成になっている。これを別の切り口で、フィールドワークを主とする第Ⅰ・Ⅲ部と、デスクワークを主とする第Ⅱ部とに二大別することも可能だろう。取り上げた対象からいっても、第Ⅰ・Ⅲ部が風水、占い、占い師という占卜のことであり、第Ⅱ部が『通書』『玉匣記』『万宝全書』という書物のことである。量的にも、ほぼそのようになっている。

沖縄を含む中国の周辺——著者流に言えば「辺縁」——の地域にこそ、中国の古い文化が残っていることは周知のことだが、本書に取り上げられた風水や各種占卜やそのテキ

三浦國雄著

『風水・暦・陰陽師——中国文化の辺縁としての沖縄』

A5判・二五六頁・榕樹書林・四、七二五円



ストともいえる『玉匣記』『万宝全書』などは、中国では研究対象として取り上げられることがなくて、成立の経緯や内包する意義も利用の実情も知られていなかった。それが沖縄やその周辺における情況がわかってきたことよって、逆に中国における情況も次第に明らかになってきた。琉球・沖縄研究が中国に向けて逆照射することになり、中国研究ともなっている。これはフィールドワークとデスクワークの並行を重視する著者の研究方法の成果に他ならないだろう。

二 琉球・沖縄の風水とサンジンソー

第Ⅰ部では、琉球・沖縄の風水が国家・村落・家屋・家庭を保護——抱いてまもる——する科学技術として国家的レベルでも個人的レベルでも重視されてきたことを指摘し、日本本土とはその存在意義が全く異なっていたことを

述べている。また伊是名島では今なお活躍している古い師
Ⅱユタの某氏を訪問して聞き取り調査を行ったことが報告
されている。久米島の旧家の近世文書の中には少なからず
「古文」「吉凶判断」の文書が残されていて、中にはマニ
アルとしての実占例を越えて、ある個人の実生活上の必要
によって占った具体的な記録が残されており、精神のあり
ようまで知ることができるという。これなどは即物的でリ
アルな記録で、社会史や精神史の資料としても極めて興味
深いものである。ただ著者は「沖縄以外にあるのか知らない」というが、日本本土でもありそうである。曲亭馬琴は
家庭生活の悩みを、しばしば易占・関帝靈籤・各種通書に
頼って解決したと日記などに具体的な記事が散見する(柴
田光彦「馬琴と方位・吉凶をめぐる」『歴史読本』一九
九二年三月臨時増刊号、新人物往来社)。だが中国でこれ
ほど生々しい記録は見つからない。

第三部では、サンジンソー(三世相)といわれる沖縄の
易者六軒の家に伝わった書籍・文書に基づいて調査し、と
くに吉浜智改と金良宗邦の二人に絞って、その実践と人物
について考察している。戦後の昭和時代に易占を主とする
古いや風水が生き続け、しかもそれが織物同業組合長や具
志川村長を務めた吉浜智改、近代哲学や宗教に通じた金良
宗邦らによって担われたという。前近代と近代が同一人物
のなかに同居していた沖縄の知の有りように戸惑いと興味
をそそられる。

三 「通書」「玉匣記」「万宝全書」

「通書」とは旧中国で国家頒布の正式の暦「時憲暦」(時憲
書)に対して、民間で刊行された暦註を備えた暦のことと
ある。日の吉凶を選ぶのに使用された。琉球では通書が政

▶ トップページにもどる

府の暦に使われたこともあったが、中国では民間の刊行で
あったから権威がなく、研究もされなかった。しかし実際
には、日常生活の必需品だったらしく、今日に到るまで生
き続けている。そこには中国人の生活や精神が凝縮してい
て貴重なものだが、トータルに研究したのは、米国のリ
チャード・J・スミス著『通書の世界——中国人の日選び』
(原題 Chinese Almanacs、三浦國雄監訳、加藤千恵訳、
一九九八年二月、凱風社)が唯一のものである。三浦書の
第二部の「通書の世界」は、このスミスの書に付された三浦氏
の解説である。それによれば、スミスの慧眼にもかかわ
らず、『玉匣記』が体裁が異なるためか、れっきとした通
書であるにもかかわらず、全く取り上げられなかったとし
て、その成立と展開、海外への伝播、沖縄における流布に
ついて三浦自身が考察を行ったという。沖縄には版本で七
種、写本で二種残されていると指摘している。『玉匣記』
に関しては最も詳細な調査報告である。

中国では、明末ころから『万宝全書』とか『不求人』とか
と称された生活百科事典が出現した。ここにも日選びの部
門が収められており、部分的に『玉匣記』と共通している。
今日この種の書は日用類書と呼ばれることが多い。この日
用類書は日本に多く保存されていることが知られている
が、近年は発見が進んで、明末清初刊本で数十種(同版は少
ない)に上り、清刊本を加えると更に多くなる(同版が多
い)と推測される。沖縄にも竹原家文書と与世永家文書に
版本の『万宝全書』が各一部、計二部が残されていて同版と
みられる(だが微妙に異同があつて、いささか気にはな
る)。このテキストは他のどの『万宝全書』とも異なる別系
統である、と三浦氏は報告している。確かにそうで、この
沖縄本『万宝全書』がなければ、この種の日用類書の存在は

知ることができないわけで、沖縄文書の貴重さを知らされる。

ただここで気になるのは、この沖縄本『万宝全書』が他の『万宝全書』と別系統で、清刊本や現行の台湾・竹林書局本とも異なるとはいっても、現行の台湾・竹林書局刊行『万事不求人』と同一の箇所がかなりあるから、全くの異本ともいい切れない。清末になると日用類書は『万宝全書』と『不求人』の二種に収斂してしまったかの感があるが、この沖縄本を見ると、どうもことはそう単純でないようである。

沖縄の古書や古文書は先の戦争を経て多くが失われたとは聞くが、現在もお整理が続けられていることからすれば、それほど多いともいえる。それを整理し零細な細部をつなぎ合わせて、有機的な精神世界を構成していく作業は容易なことではないだろうが、門外漢の気安さから、望蜀のことながら、要望めいた感想を一つ二つ。

家文書の中に各種の古い文書と関連して善書(ほとんどが写本?)が目につく。「太上感應篇」「文昌帝君陰文」「閔聖帝君覺世真經」「諭勸敬惜字紙」などが多い。これらは『玉匣記』や「閔聖帝君靈籤」と通じ合って一つの精神世界を築いているわけだから、占いと関連させて取り挙げてもよいのではないか。現在伝えられる琉球王国時代の中国語教科書の『広応官話』人事門に、神前でおみくじを引くときの関連用語が「討筊、抽籤、求籤了、求筭了、高興、掃興、有趣、興趣、多端、……」などとあつて注がついている。また竹原家文書(三浦書一七三頁)や金良宗邦図書(同二四四頁)に『四書体註』が出てくるが、『学官話』と『官話問答便語』に本を買いに行くスキットがあつて、そこに『四書体註』を含む八種類の書名が列挙されている。ここから期

トップページにもどる

待される留学生の心構えが推測される。文書の片言隻語が琉球文化総体を志向する細部を構成していることを痛感させられる。この様な文書の活用もありうるのではないか。

本書は琉球・沖縄のことを扱いながら、中国のみならず日本本土・朝鮮半島をも念頭に置いて考察を進め、東アジア全体のなかで琉球・沖縄の知のありようを浮かび上がらせた点で意義深いものがある。発表先が異なっているために、文章のトーンは一樣でないが、いずれも平易・明快で読みやすく、時にはユーモラスで楽しい。琉球・沖縄の生活文化を紹介した格好の読み物でもある。

以上門外漢の気楽さから、的はずれで、批評ならぬ思いつきを書き連ねた。妄言多謝。